



Data

監督・脚本：リューベン・オストルンド

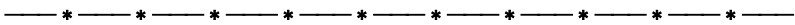
出演：クレス・バング/エリザベス・モス/ドミニク・ウェスト/テリー・ノタリー/クストファー・レス

👁️👁️ みどころ

“信頼と思いやりの聖域”である「ザ・スクエア」内では、すべての人が公平に扱われるのがルール。そして、人間の善意を信じる人は入口に携帯と財布を置いていかなければならないが、さてあなたなら・・・？

『フレンチアルプスで起きたこと』(14年)で鋭く人間の本性に踏み込んだスウェーデン生まれのオストルンド監督が、本作ではさらにそれを徹底させて、「悪の凡庸」とも共通する「傍観者効果」の社会的実験を！カンヌはクソ難しい映画がお似合いだが、そこで最高賞を受賞した本作はメチャ興味深い。SNSによる拡散は嬉しいが、炎上は恐い。しかし、そこにもいろいろな落とし穴が・・・。

猿と人間の違い、猿と人間の共存、さらに人間の隠された動物性にまで踏み込んだ、度肝を抜く演出はお見事だが、賛否両論あるのは当然。しかし、キレイ事ばかりがまかり通る今のニッポン国では、こんな映画で人間の本性をまっすぐ見抜くことが不可欠だ。



■□■カンヌはクソ難しい映画がお似合い！そのテーマは？■□■

本作は第70回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞したもの。そのテーマは「美術館を舞台に毒とユーモアで人間の本性を暴く、傑作悲喜劇！」。これを読んだだけで、カンヌ国際映画祭がいかにクソ難しい映画がお似合いかわかる。

本作のパンフレットには、リューベン・オストルンド監督の「監督声明」と「DIRECTOR'S NOTE」が4ページにわたって掲載され、そこでは『ザ・スクエア』の

意義と狙いが語られるとともに、本作が“社会的実験映画”であることが明確に示されている。その上で、①主人公クリスティアン（クレス・バング）の人間性、②正義は幸せを買えるか？、③「イイネ！」よりも炎上を狙え！メディアが私たちを悪化させる方法、という3つの論点について、オストルンド監督の見解が述べられている。さらに、ここでは『ザ・スクエア』のアートプロジェクトについての解説がされているので、これは必読！

なるほど、なるほど。しかし、それにしても改めてカンヌ国際映画祭はクソ難しい映画がお似合いなことを実感！ちなみに、ここでは「ART PROJECT "THE SQUARE"」について次のように解説されているが、これを何回読んでも、やっぱりプロジェクト自体がかなり難解だ。

ART PROJECT "THE SQUARE"

“ザ・スクエア”のアートプロジェクトについて

映画『ザ・スクエア 思いやりの聖域』のアイデアは、2015年、スウェーデンのベーナムーにあるデザイン美術館 Vandalorumで催されたリユーベン・オストルンドとプロデューサーであるカッレ・ボーマンのアート展示“ザ・スクエア”から来ています。当初それは、スウェーデン全都市の中心部に人道的な聖域を設置するというアイデアでした。町の広場（スクエア）に設置された四角形（スクエア）の枠内では、すべての人に平等な権利と義務が与えられるのです。リアルな“ザ・スクエア”はベーナムーの町に設置され、成功を収めました。そして、同じような“ザ・スクエア”がロイヤルファミリーのいるグリムスタに設置され、次々に増えています。“ザ・スクエア”には、他人への思いやりを向上させる能力があり、周囲に他人が存在するとき、被害者を手助けしなくなるという社会現象“傍観者効果”に対して、プラスの影響をもたらす可能性があるのです。

■□■監督の問題意識は？「ザ・スクエア」のルールとは？■□■

スウェーデンは高福祉だが高負担の国として有名だし、それでうまくいっている理想的な国といわれている。人口が少ないからこそできている面や、民主主義の意義が根付いていることもあるのだろうが、その点は日本とは大違いだ。そのため、日本にはスウェーデンを極端に美化するエセ学者も多いが、1974年にスウェーデンに生まれたオストルンド監督の問題意識は全く逆。つまり、彼は、「世界で最も平等な社会と言われるスウェーデンですら、失業率の上昇と状況悪化への恐れが個人間の不信、そして社会不信を招いています。広まりつつある政治の無力感が、私たちの国家への信頼を覆し、内に閉じこもるよ

う後押ししているのです。」という問題意識が強いらしい。

『フレンチアルプスで起きたこと』(14年)は「一家の主(父親、夫)はこうあるべし!」という当然の価値観が根底からひっくり返るショッキングかつ皮肉な映画だった(『シネマ36』119頁)が、「男だって泣きたい動物」だとしたら、そんな行動の方がむしろ人間的かも・・・? 同作はオストルンド監督流の人間に対する鋭い洞察力から、そんな人間の本性を赤裸々に浮かび上がらせた面白い映画だったが、「ザ・スクエア」を使って広くそんな社会的実験をしてみると・・・?

「ザ・スクエア」のルールは次のとおりだ。すなわち「ザ・スクエア」は〈信頼と思いやりの聖域〉です。この中では誰もが平等の権利と義務を持っています。この中にいる人が困っていたら、それが誰であれあなたはその人の手助けをしなくてはなりません。さあ、この「ザ・スクエア」での社会実験とはいかなるもの?そして、その結果は如何に・・・?

■□■主人公の価値観は?その新たな社会的実験は?■□■

本作の主人公クリスティアン(クレス・バング)は現代美術館のキュレーター。彼がなぜ前述のルールのような「ザ・スクエア」を思いついたのかは、クリスティアンの性格分析をしながらじっくり考えたい。「ザ・スクエア」で最初に突き付けられる質問は、「あなたは人間の善意を信じますか?」というもの。その答えがYESかNOかによって、入口が右側か左側かに分かれる上、「信じる」と答えた人は、自分の携帯と財布を床に置いていかなければならないから、さあ、あなたはどうする・・・?大切な携帯と財布をあなたはホントに人の善意に委ねて床に放置することができる・・・?

クリスティアンは人間の善意を信じるタイプだが、本作導入部ではクリスティアンの携帯が急になくなる(盗まれる?)という事態が発生するので、その後のクリスティアンの対応に注目!そんな時、「傍観者効果」によって、誰も助けてくれないことを知ったクリスティアンの価値観の変化は?また、立派な設備の現代美術館やその中に設置された「ザ・スクエア」を訪れてくる客は当然紳士淑女ばかりだから美術館の外で飢えているホームレスにとって、この「ザ・スクエア」は何の興味もないもの。したがって、寒さと雨露をしのぐために美術館内に入ってきたこのホームレスは、通路の片隅に客が投げしてくれるコインを狙ったコップを置いてうずくまっているだけだったが、さあ誰がそんな彼を美術館から追い出すことに?

『フレンチアルプスで起きたこと』では、家族そろってやって来たリゾートホテル内で、常に正論を吐いていた一家の大黒柱たる、夫であり父である主人公が、いざ雪崩が起き身に危険が及んでくると、妻子を放ったらかして自分だけがトンズラ・・・。そんな何とも恥ずかしい風景に思わず苦笑せざるを得なかったが、本作におけるクリスティアンの行動もそれと似たようなものばかりだから、それに注目!「モリカケ問題」で最近やっとな参考人招致が実現した前首相秘書官・柳瀬唯夫氏の国会での発言を聞いていると、これもクリ

スティアンと同じと思って苦笑してしまうが、そうこう考えると、クリスティアンが「ザ・スクエア」でやろうとしている新たな社会的実験の正否は・・・？

■□■傍観者効果とは？悪の凡庸とも共通・・・？■□■

私は『ハンナ・アーレント』(12年)を観てはじめて「悪の凡庸」を知り、大きなショックを受けた(『シネマ32』215頁)。しかして、本作ではその「悪の凡庸」とも共通する「傍観者効果」の実験が登場するので、それに注目。「傍観者効果」とは、他人が助けを求めている時、自分以外に傍観者がいる場合、率先して行動を起こさない心理を表す社会心理学用語の1つで、救助の確率は傍観者の数に反比例するらしい。その理由は、集団的無関心。つまり、大勢の集団では“責任の拡散”が発生しやすいため。そして、そこが「悪の凡庸」と共通するものだ。

オストルンド監督は「DIRECTOR'S NOTE」の中で、自分の父親の時代には、「当時の大人たちは、他の大人たちのことを子どもがトラブルに巻き込まれた時に助けてくれる信頼できる地域のメンバーと見なしていた」こと、そのため「父の両親は父が幼い頃、ストックホルムのダウンタウンで遊び回らせてくれたらしい。それは彼が迷子になった時に備えて、住所のタグを首にかけていた」という事例をあげている。更に、オストルンド監督は“善きサマリア人の実験”を挙げることによってそれを解説しているので、それらをしっかり勉強したい。なるほど、傍観者効果とはそういうこと！そう考えると、あるわあるわ、私たちが日常的に目にする、あの現象もこの現象も、すべて傍観者効果の1つでは・・・？

■□■この矛盾をどう考える PR作戦とその炎上■□■

本作のパンフレットには、①古市憲寿(社会学者)のREVIEW1「僕たちは醜い。まずそこからはじめよう」、②立田敦子(映画ジャーナリスト)のREVIEW2「おちおち笑ってられない。感情で味わう、観客参加型の実験映画」、③飯田高誉(インディペンデントキュレーター、スクールデレック芸術社会学研究所所長)のREVIEW3「ザ・スクエア 思いやりの聖域—関係性の美学」があり、それぞれの視点から本作のユニークさを分析している。これは前述した、4ページにわたるオストルンド監督の「DIRECTOR'S NOTE」と共に必読だ。

本作は『フレンチアルプスで起きたこと』を鑑賞した時以上に、人間の行動の矛盾について、苦笑いしながら考えさせられることが多い。その一つの例が、クリスティアンの「ザ・スクエア」の企画をいかにPRするかについての面白い寓話(?)だ。クリスティアンと現代美術館が「ザ・スクエア」の企画をPRするために選んだ2人の専門家は、「世間の注目を集めるためには物議を醸す必要がある」と考えて、何とも過激な動画を提案することに。もちろん、その採否の責任はクリスティアンと現代美術館側にあるが、その提案を採

用したことによって「ザ・スクエア」のSNSが急拡散したのは見込み通りだったが、その度が過ぎて「炎上」してしまったから、大変。このエピソードはスウェーデンの有名広告代理店による実際の挑発的なPRにインスパイアされたオストルント監督のアイデアだそうだが、そこには「良すぎても拡散しない」という皮肉な現実があるわけだ。

これと同じような、SNSによる発信とその炎上という現実を毎日のように見ている私たちは、それをどう考えればいいのか？センセーショナルなイメージは、例え非人道的であろうとも即座に人々の関心を集め、SNSを通じて瞬く間に世界中に広がっていくわけだ。「映像は最も強力な表現方法であると同時に、最も危険なものでもあります。この映画を、友人たちと様々に議論するきっかけにしてくれたら嬉しいです」とオストルント監督は語っているが、問題は既にそのレベルを超えているのでは・・・？

■□■猿と人間の違いは？共存は？人間の隠された動物性は？■□■

人間は猿から進化してきた動物と言われているが、猿と類人猿、猿人、原人等の違いは難しい。また、3週続けて観たNHKスペシャルシリーズ『人類誕生』によって、私はホモ・サピエンスとネアンデルタール人は全く違うらしいことがよくわかった。そんな難しい「進化論」を巡る学術論争はともかく、本作では想像もできない形で、猿と人間の違いは？猿と人間の共存は？そしてまた、人間の隠された動物性は？が、スクリーン上で表現され、炸裂するので、それに注目！

その第1は、クリスティアンの取材にやってきた女性記者アン（エリザベス・モス）と懇ろになったクリスティアンが、はじめてベッドインするべく訪れたアンのマンションの部屋の風景。そこには何と、チンパンジーが飼われていたから、クリスティアンはビックリ。チンパンジーにウロチョロされたのでは、普通の男はおちおちエッチもできないはずだ。

さらにビックリさせられたのは、今や本作の代名詞にもなっているテリー・ノタリー扮するオレグの“猿パフォーマンス”だ。『猿の惑星：新世紀（ライジング）』（14年）（『シネマ33』246頁）で猿の演技を十分学んだこともあって、美術館のパーティ会場でオレグが見せる猿パフォーマンスは、まさにどこまでが演出でどこまでがホンモノなのかの区別もつかない圧巻の出来。ちなみに、カンヌ国際映画祭では、テリー・ノタリーが猿になりきってレッドカーペットを歩き、周囲の度肝を抜いたというから、それにもビックリ。いくら演出とはいえ、たかが猿にここまで威圧的な行動を取られたら、私なら怒って席を立ってしまうはずだが、さて、カンヌ国際映画祭の参加者たちは・・・？

もっとも、私たち人間はすべて、本作でオレグが見せたような“猿パフォーマンス”の資質があり、それが「人間の持つ動物性」だそうだが、さあそれをどう考えればいいのか？

2018（平成30）年5月12日記